

(8) すみれひの記

## 相撲の私記

すみれひの記

成田峯雄

寛政三年六月十一日、吹上にして相撲御覽の事有り、  
 兼ておなじつらなるものども、公事のいとまに見  
 侍るべきよし、御ゆゑしからむりて、朝のぼじより  
 御見物かたに参りつゞる。抑久かたの雲井（皇居）の庭  
 にして、としどとにすまひのせつ、行れしも、  
 保安に中絶、保元にふたたびおじせしが、其後は又  
 絶て聞へず。たけくわめぬものふのうへに、便  
 あればにや、鎌倉右大将家の頃、専ら同位有り  
 無も、高きこやしき別たぬなく、力をぐらべ、明暮の  
 たばられ草とせしより、室町家の時なども、御覽のこと  
 あつことだ。しかあれど、墨うつり物がわりて、こ  
 とじ使などいふことも聞へず、葵・ゆうがほのかぞしも  
 絶しより、今様は、四本のはしら、土俵などいへる物  
 さへいできたりて、いにしへのこととはかわりたる。その  
 はじめ、最手といへるも、今は大闊と名をかえ、助手は  
 関わきととなへ、いむすまひと称するをあわせて三の役  
 とし、われより前頭、まぐの内、まぐの下、三段、四段、五段  
 ほんかつ・あいちう・前すまひと其品をわかち、犢鼻禪  
 はまわひとよび、すまひのおわは行司といい、弓・弦・扇  
 の三べわを四本の柱にゆひつくる。皆有りる定と  
 なれり、その名どもも見きくまことにしつづ  
 たべし。今口詫へせりなへ、常盤なる松がえ見渡し、

(9) (中略)

「是より三役」と称せり。行司

木村庄之助、小結 優童 様  
 すぐれて丈たかく、少し心ぬきやつせ。柏戸は姿か

たけとひのひ、令せやう（嬌嬌）有り、いふべきもつたうと見へ、つま

心

とつ差寄て、因手にくみ、土俵際へをしづねたり。庄之介

柏戸が方へうち（わ脱力）やへが、「いむかびの職にたへたり」と

賞して扇をせり。かのをせたるわらはの鼻白ぬる、うし

う手ほい（本意）なげ成り。関脇東の陣幕に雷電とて、此頃成

かみよりもひゞきわたれるをあはす。立合様に陣幕は

やく雷でんがのびへ手をかけ、「のじわざぬ」といふ

手しで、只一度に、土俵へ押つめたり。此ほどの内ど

りには、こゝりの相撲に立合ぬるむ、ヒヨリほりなべ

勝ぬるを、思ひの外にもあるかなど人云。「今日の關脇に

かなへり」とて、弦を陣幕にあたら。しばしためらひ

て、追風善左衛門、遠つおやの、内裏より賜りし唐衣

四幅の袴といへるものをき、師子王といふ因扇の

せ々伝へたるを持、ねり出たるおもへ、先ゆへありと

見る。土俵の中央ばかり、少し後によりてたつ。左右より小野川・

谷風ゆたかにあゆみ出、御物見のかたを押し、土俵に入り、

左右に立ならば。今日の御覽は是をむねど、上中下

さざめきたつ。左にかたふとし、右に心ひくも有り。六十余州

にゐるわれたる手合なれば、これにて越たる物見有べしとむ

覚えず、ゆすりみだらぬに、行司さしかまへたる因扇

の下より、小野川、谷風にとりかゝる。追風左右をとりは  
 たべし。今口詫へせりなへ、常盤なる松がえ見渡し、

なれど、因縁にまだひかず、誰も懸念<sup>ゆきねん</sup>に、取かつたる  
 ことせり無<sup>む</sup>しとて、しきりにやれやれ、ふたゝび如<sup>再</sup><sub>再</sub>似<sup>そ</sup>す。しばしためりひて因縁<sup>いんえん</sup>と声<sup>こゑ</sup>とへもて、西の谷風  
 ふと響<sup>ひび</sup>て、はねたれば、小野川とじりあらに不及、ふた  
 あし三足たがりぐと、追風、谷風に因縁<sup>いんえん</sup>をあげ、<sup>授</sup><sub>風</sub>  
 「から<sup>くら</sup>の闘にかなえり」とて、弓をさばく。谷かぜ先のつよみ、  
 小野川後<sup>うしの</sup>のよわみとて、勝負決せるなりと。良たに  
 かぜがおやぬの手<sup>心</sup>、出したらんには、山をも抜つべきを、かく  
 ては<sup>失</sup>ことゆかぬ<sup>心</sup>地<sup>じ</sup>したれど、野見の宿<sup>たご</sup>祢<sup>み</sup>が蹶速<sup>けはや</sup>  
 を<sup>う</sup>しなひ、畠山庄司<sup>柄</sup>次郎が、長居を絶入せさせし  
 やつなるよりも、事がいつまほじく、さて有べき  
 にやあらん。谷風、弓をひか、うやまひや<sup>ハ</sup>、四方にひり  
 回しながら、打かたげ拝して入ぬ。此弓を給ぬ<sup>いた</sup>ば、  
 織田内府の近江の国常楽寺にして、富地と  
 いへる強力を、闘にて相撲見給ひし時、勝たるを賞して  
 給へるより、今にかくなんといへり。

勝がたに 今日給はれる 梓弓

元の便なる 例<sup>ためし</sup>をやひく

(後略)

寛政四年秋四月  
（も）